

東北地方における毘沙門天像と田村麻呂伝説の関連について

西川明子

はじめに

仏法を守護する四天王のうち、代表格であるとされるのが多聞天である。それはまた独尊としてまつられることがあり、その場合、毘沙門天の名前で呼ばれる。四天王のひとつとして、あるいは単独像として、インドのみならず中国や日本においても古くから多くの像が作られてきた。わが国では、仏教彫刻の黎明期である飛鳥時代に出現し、とりわけ奈良末期から平安時代にかけては造像が盛んで、秀逸な作品も多く生まれている。

作例の多くは畿内に分布しているが、なぜか東北地方の

岩手県北上地方にも集中して、平安時代後期の作例が見いだせる。当時の政治・文化の中心だった畿内から遠く離れた北東北に、なぜ毘沙門天が多数造像されたのか。このことは従来指摘されながらも一層深くは追求されなかつた興味深い問題である。

この問題を考察するにあたって、像が納められた寺院のみならず、その地域一帯の、歴史や民俗は重要な手がかりとなる。なかでも、平安時代の武将であり、東北地方を平定した坂上田村麻呂に関する史実と伝説は、寺院の縁起にも深く関わっており見過ごすことはできない。本論では、東北地方の歴史と毘沙門天の造像の系譜を検証し、これに田村麻呂伝説を加えて考えることで、東北地方における仏

教文化の広がり、一形態を明らかにしようとするものである。

一、毘沙門天とは

東北地方の作例に目を向ける前に、毘沙門天像について簡単に言及しておく必要がある。

仏教が成立するはるか以前から、インドで広く崇拜されていた土着的な民間信仰の神々のいくつかは、仏法の守護神として仏教に取り入れられた。毘沙門天もそういった神格の一つで、その起源は紀元前四世紀ごろ成立したインドの叙事詩『ラーマヤナ』、『マハーバーラタ』に登場する、財宝と福を司る北方守護の善神、クベーラ・ヤクシャに求められると言う(2)。

クベーラ・ヤクシャは仏教が発展するにつれ、仏教守護の四天王の一人に数えられるようになっていく。四天王は、仏教の世界観の中心にそびえる須弥山の中腹において仏教世界を守護するとされ、四方に各一天ずつが配位される。東方が持国天・南方が増長天・西方が広目天・北方が多聞すなわち毘沙門天で、毘沙門天は四天王中で最強の、

首領格の存在であるとされる。

インドでは、紀元前より四天王は貴族の人の姿で表わされ、武器も持たないことが多い。AD一世紀ごろから始まるガンダーラの仏教彫刻では、四天王の中の一体として表わされる場合、北方遊牧民の王侯の姿をとることがあるという(3)。ガンダーラではまた、毘沙門天が釈迦に従う守護神として、出城などの場面に登場するとの説もある(4)。だが甲冑に身を固め、険しい表情をした武将の姿で表現される日本の毘沙門天像の、直接の祖形は「ガンダーラ」の図像を継承し、発展させた六〜七世紀の中央アジア「特にホータン地方」にある」とされる(5)。すると中央アジアにおける毘沙門天像の展開が、日本の毘沙門天像の成立を理解する上で重要と考えられるが、現在のところ余り多くの作例が知られておらず、また中国の毘沙門天像についても、徐々に作例が紹介されてきているとはいえない。だ十分とは言えない状況にある。本論文では東北地方における四天王及び毘沙門天像の特殊性に注目することもあり、中央アジア及び中国の作品との比較はあまりおこなわず、日本国内の作例を中心に言及し、論を進めていきたいと思う。

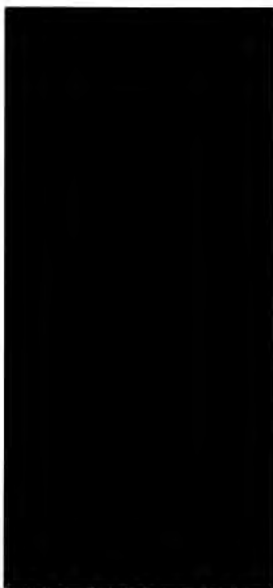
二、日本における四天王像の流れ

わが国では四天王はまず、釈迦などに従属する神格として表現された。最古の例としては、六二三年の銘記を持つ、法隆寺金堂釈迦三尊像の台座に描かれた四天王像が知られている。剥落が激しく、四体の比定はままならない状態だが、四体それぞれが刮目し、着甲して武装しているのが判明している。この図像に影響を与えたと見られているのが中国の、南北朝時代の四天王像であるという(8)。そのいづれもが四天王を着甲武神形で表現しており、それぞれの右手には宝塔が捧げられている。多聞天を四天王の首領格と見なし、造像においても他像との区別をはっきりさせることは、すでにガンダーラにおいておこなわれていた。しかし宝塔を捧げ持たせる形式は、インドやガンダーラでは見られず、中国独自の四天王表現であるとされる(9)。そして朝鮮・日本の四天王像もこの形式を継承した。

下級の神像としての四天王像は他に、東大寺戒壇院の四天王塑像(図版1)、法隆寺食堂の梵天・帝釈天と一具の四天王像、同じく梵釈をふくむ唐招大寺金堂の四天王像な

どを初期の作例として挙げることができる。また、興福寺東金堂の四天王像は、奈良末期の作と見られているが、その像容(多聞天の場合、右手に宝塔を捧げ、左手に戟を持つ)は、六四二年頃漢訳された『陀羅尼集経』の記載と一致している(10)。

十世紀に入ると、新たな形式の四天王像が定着し始めた。九五一年造立の、京都・六波羅蜜寺の四天王像がその初期の代表作で、なかでも毘沙門天は、冠を戴く代わりに頭に兜をかぶり、右手に持っていた宝塔を左手に捧げるようになる。体軀はどっしりと表現され、着衣の布の動きや下半身の構え方など、各部にゆとりある造形がなされている。他に、周坊国分寺像、九九三年頃の滋賀・善水寺像、



図版1 東大寺戒壇院 多聞天
「原色 日本の美術3」小学館

九九〇年の法隆寺大講堂像、延暦寺の根本中堂像、三重・市場寺像などが同じ特色を示す作例として挙げられる。これらの、左手に宝塔を捧げる和様四天王像は、延暦寺国宝殿に安置してある四天王像が起源であり、その像容は唐代後期の『金剛頂瑜伽護摩儀軌』に根拠が求められるとい(9)う。

ここまで釈迦と組み合わせられた、釈迦像に付随する形の四天王像の流れを追ってきたが、これと同時に、四天王を主尊として扱う流れも存在していた。四天王による国家守護を説いた經典『金光明経』に基づいて造像された作例がこれにあたる。法隆寺金堂の四隅に配された像が現存する最古の例である。このうち広目天は持物として筆と巻物をそなえているが、これは日本でしか見られない特徴である。毘沙門天(多聞天)(図版2)は宝塔を右手に捧げ、左手で戟を地に突いているが、像の動きは少なく、正面性の高い、静的な像になっている。着衣も着甲と言ふよりは中国の官僚の衣装をまとうているようで、武神という印象はあまり受けない。

『金光明経』は七〇三年に唐の義浄によって『金光明最勝王経』として新訳され、これが遣唐使を通じ日本にも

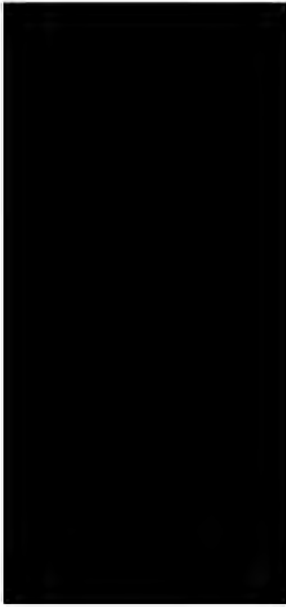
入ってくる。この『最勝王経』は、内容的には『金光明経』と変わるところはあまり無いが、四天王の関連箇所が、新しく福徳の女神吉祥天が登場する。吉祥天は毘沙門天居城の庭苑の中に宮殿を構えて住まうと説かれており、このことから毘沙門天と吉祥天を特別に一具にして造像することも行なわれた。一〇七八年に行なわれた吉祥悔過の本尊として、法隆寺金堂に安置された毘沙門天・吉祥天がこれにあたる。

三、日本における毘沙門天像の流れ

以上、四天王として造像された毘沙門天を見てきたが、独尊として奉られた毘沙門天像も早くから存在した。平安



図版2 法隆寺金堂 多聞天
「日本仏教美術各宝展 図録」
奈良国立博物館



図版3 東寺 兜跋毘沙門天立像
「東アジアの仏たち展 図録」
奈良国立博物館

時代の初期には、中国の独尊毘沙門天の信仰形態が、遣唐使や入唐した学問僧によって日本にもたらされ、平安時代以降は単独の本尊として造像される毘沙門天も展開していくのである。

独尊としての毘沙門天の日本最古の例は、現在京都・東寺に安置された西域風の着衣を示す毘沙門天像である(図版3)。この毘沙門天像は八〇五年に遣唐使が唐から持ち帰ったもので、同年完成した平城京の、羅城門の楼上に据えられたとする説が有力である。毘沙門天が城門の楼上に据えられ、敵の襲撃を受けた唐の城を救ったという故事があり、それに従って唐の都で行なわれていた方式を、平城京でも模倣した形であったが、その後建物が崩壊し東寺に移

されたという。ただし最近、この話は伝説に過ぎず、本来羅生門には据えられていなかったとする意見が発表されている(10)。

この毘沙門天像は左手に宝塔を捧げ、右手で戟を地に突いて、険しい顔で正面を向き、中国で作られたと見られる像でありながら、イラン系の民族衣装の特色も見られる西域風の甲冑を身に付けている。また、足下は邪鬼を踏むのではなく、地天女に支えられている。この東寺像に始まる、西域用の甲冑をまとい、地天女を足下に従える毘沙門天は、特別に兜跋毘沙門天と呼ばれ区別されている。

どのような形式的特徴を持った毘沙門天が「兜跋」と呼ばれているかについては、様々な議論が存在する。「兜跋」とはその音から「吐蕃」すなわち「西藏(チベット)」と同義語であり、西域コータンにその発生を求めることができるとする説(11)。または、「兜跋」はチベット由来の中国語で、中国では古来同音の「斗跋」「斗篷」と表記され、それは「長い外套状の上着をつけた」状態を指す言葉であるとする説(12)が知られている。これらのいずれもが、西域様を示す服制という特色から、他の毘沙門天と区別するため「兜跋」という言葉が使われていたとしてい

る。一方、猪川和子氏によれば、日本における兜跋毘沙門天像とされるものの中には、東寺像と同様の、西域風の着衣のものはむしろ少数で、作例を見渡す限り、「兜跋」という語は「地天女に支えられた毘沙門天」を指し示すために使われているということである⁽¹³⁾。本論で詳しく取り上げる毘沙門天像に西域風の着衣のものが無いこともあり、猪川氏に従って、服制の違いに対してではなく、足下を地天(女)に支えられた毘沙門天像に対してのみ、「兜跋」という語を使用する。

日本における独尊の毘沙門天像の造像は、西域風の着衣をそなえた東寺像から始まったが、その後は服制上で中国化の進んだ毘沙門天像も造像されていく。滋賀・石山寺の兜跋毘沙門天像、福岡・観世音寺の兜跋毘沙門天像などが代表的な作例として挙げられる。また、独尊の毘沙門天が本尊に据えられた例には、京都・鞍馬寺の毘沙門天像がある。この像で見られる、宝塔を捧げずに左手に戟を持ち、右手は腰に当てる像容は、空海が伝来した儀軌にしたがっており、平安時代からの新しい形式として福井・清雲寺の毘沙門天像や岐阜・乙津寺像、滋賀・明王院像に受け継がれていく⁽¹⁴⁾。

これらの毘沙門天像の流れとは別に、毘沙門天と不動明王を一具にした造像も平安時代に始まっており、毘沙門天の表現は多様な枝分かれを見せている。しかしその作例の分布は主に西日本に限られており、東日本における中世以前の毘沙門天像は希である。中部に静岡・願成就院像などが見られるが、この像も含めて、東日本のほとんどが運慶様式を取り入れた十二世紀以降の作品ばかりであり、東北地方に点在する毘沙門天像が平安時代に造像されているということは、非常に特殊な状況であると言えよう。この時代の東北地方の主要な毘沙門天像としては、岩手・山形・宮城・福島各寺におさめられた二二体⁽¹⁵⁾が挙げられるが、そのうち本論で詳しく取り上げる成島毘沙門堂像(図版4)、立花毘沙門堂像(図版5)、藤里毘沙門堂像(図版6)をはじめとする七体は、岩手県北上地方に集中している。福島は二体は不動明王と対になった十二世紀以降の作であるから、独尊の毘沙門天像が五〇キロの地域内に集中しているのは、東日本ではこの岩手県北上地方だけということになる。このことに注目し、以下東北へと視点を移していく。



図版5 岩手県 立花毘沙門堂 毘沙門天立像
「きたかみの古仏」北上市立博物館



図版4 岩手県 成島毘沙門堂像 兜跋毘沙門天立像
「きたかみの古仏」北上市立博物館

岩手県・北上地方とは、県の南半分の平野を指し、太平洋側の北上高地と、秋田県との境にそびえる奥羽山脈の間を縫って流れる北上川に沿った、肥沃な土地である（地図1）。この地方は古くから、東北における政治・文化・宗教の中心地として重要な地であった。

東北地方は古代、その地理的要因からなかなか律令支配の徹底が図られず、平安時代まで「蝦夷」と呼ばれる反勢

四、岩手県北上地方の仏教文化



図版6 岩手県 藤里毘沙門堂 兜跋毘沙門天立像
「きたかみの古仏」北上市立博物館



地図1 岩手県 北上地方略地図

(参考文献)『最新基本地図 世界・日本 19訂版』帝国書院
『東北 都市詳細道路地図』昭文社)

力が大和朝廷の支配に抵抗を示していた(16)。これらを平定すべく、朝廷は幾度も「征夷」と呼ばれる軍事行動を起し、東北地方には征夷の結果多数の「城」や「柵」が築かれ、その遺構が現在も残っている(17) (地図2)。この城柵を足がかりとして、中央の政治経済はもとより、文化や宗教も東北地方に流入していくのである(18)。

岩手県北上地方は、平安時代に入っても蝦夷の抵抗が激しかった地域で、太平洋側の朝廷支配の北進は五〇年ほどこの地域で止まっていた。平安京の造営を終えた桓武天皇は、この状況を打破すべく、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じて大軍隊を派遣し、八〇二年に北上地方に胆沢城を造営する。以降、この胆沢城が、朝廷の北東北経営の中心地になった(19)。

五、北上地方の作例

A 黒石寺の造像

胆沢城を中心に、帰順した蝦夷や関東以西からの入植者が、厳しい自然の元で開拓を繰り返し、律令の下で新たな地域社会を形成していった。その中で蝦夷が信仰していなかっ



地図2 古代東北地方の城柵
 (参考文献) 『太宰府と多賀城』 岩波書店
 『蝦夷』 高橋崇 中央公論社

た仏教も急速に広まり、仏像も多くつくられるようになっていった。北上地方は福島・会津地方と並んで東日本の古代仏教彫刻の宝庫とも言われ、数多くの古い作例が見られる。最も古い例は、体内に「貞観四年」（八六二年）の年記と銘文を持つ、水沢市・黒石寺の薬師如来像である。その時期の早さから銘文の真偽が疑われたが、研究の結果、現在ではこの地方の平安時代初期の基準作とされている²⁰。黒石寺にはこのほかにも、薬師如来像に従えられた四天王像と、一〇四七年の銘を持つ慈覚大師坐像もある。四天王像のうち二天は薬師とほぼ同時期に作られたものであり、多聞天像を含む後の二天は十一世紀ごろの作と見られている²¹。

B 成島毘沙門堂の造像

黒石寺の四天王像と前後する九世紀〜十一世紀、北上地方では毘沙門天像の造像が盛んに行なわれていた。とりわけ目を引く作例は、東和町・成島毘沙門堂にある、兜跋毘沙門天像であろう。大変大きな像で、足下を支える地天女を含めると、像高は四七二センチにもなる。東北の毘沙門天像の中で最も大きく、かつ、現存する東北の毘沙門天像

の中では最も古い像である。カンバ材の一木造りで、彩色されている。左手に宝塔を捧げて右手は戟を突き立て、足下は地天女に支えられ、更に左右に尼藍婆・毘藍婆の二邪鬼を従えている。着衣は中国風の鎧だが、頭部は兜ではなく帽をかぶっている。鎧の下に衣をつけ、この衣の袖口をただなびかせずに束ねて表現している点や、鎧の上に肩から天衣を通す表現などは、他の独尊毘沙門天像にはあまり見られない着衣形式である。この両方を形式を備えているのは四天王の一員として造像された毘沙門天像のみであることも、注目すべき点であろう。全体的に、細部まで細やかな意匠が凝らされた彫刻ではなく、質感などよりも量感と迫力を重視した彫りである。姿勢にも表情にも慈悲などは感じられず、雄々しさと剥き出しの敵対心が強調されているこの像は、日本の、そして胆沢城の北方守護神にふさわしい像であったと思われる。畏怖すら感じさせる厳しい存在感は、先の黒石寺薬師如来坐像などとも通じるところがあり、この造像が時代と土地の要望に答えたものであることが理解できる。この像は東北でも珍しいカンバ材による一木造りだが、この材が中央で使用されることはないため、北上地方で作られたことが確かめられる。しかし造

像自体は、やや窮屈な感はあるものの、手法が非常に洗練されており、彩色も絢爛で、中央から移入した仏師の手を思わせるものとなっている。

この像は比叡山にあつたとされる、「仁和寺本別尊雜記」記載の俗別当・伴国道發願の兜跋毘沙門天像に倣って作られている可能性が、その特徴的な服制の類似点からも高いとされている⁽²⁴⁾。そうであれば、比叡山すなわち天台宗勢力となんらかの関わりを持った像ということになる。天台勢力が東北地方に進出していったのは元慶年間（八七七年―八八五年）であるから、この時期に布教とあわせて作られたとも考えられる。遅くとも十世紀前半ごろまでの造像であると見られている⁽²⁵⁾。

C 立花毘沙門堂の造像

成島の兜跋毘沙門天像とほぼ同時期に、北上市・立花毘沙門堂にも毘沙門天像が造像されていた。平安中期の作と見られ⁽²⁴⁾、像高一〇二センチの、一木造りで素朴な像である。左手に宝塔を捧げ、右手で戟を地に突いていたと見られるが、現在持物は失われている。足下に邪鬼を踏みつけ、着衣は中国風の鎧で、頭部には兜をかぶる。鎧の下に

見える衣の袖は束ねられておらず、右袖が躍動的に後ろへとたなびいている。姿勢や邪鬼の表情にも見えることだが、成島像よりははるかに動的な表現に重点をおいたものと見られる。鎧の細部にしろ、衣紋にしろ、細やかに表現されてはおらず、逆にこれが地元の仏師の手による作品の証とも言えない。また、彩色で仕上げようという意図があつたらしく、一見白木のように見える像だが、彩色の下地の跡がわずかに残っている。更にはこの像には鈍彫の跡もある。

鈍彫とは、像の表面を滑らかに磨き上げずに丸呑みの跡を縞模様として整然と彫り残す技法のことである。一般の木彫もこうした工程を途中で経ることから、鈍彫像は製作途中で放棄された像であるとの論が大正以来絶えなかったが、限定された時期と地方にのみ分布する技法だということと、残された作例が多いことから、現在では一つの特徴ある造像技法だとされている⁽²⁶⁾。作例はほとんど東日本にのみ残されており、その多くは関東地方のものである。東北地方に残る数点の一つに立花像も数えられるが、鎧の上に残される鈍彫がそれほど強いものでないため、中途で放棄された像であるとされたりもする。しかし、彩色の

跡が残っているということは、色を塗るところまで作業が進んでいたということであり、わざわざ鎧の部分だけ地をならし忘れたというほうが不自然である。若干の迷いはあつたろうが、鈍彫表現を取り入れようとしていた、東日本ならではの土着的な造像であると言えよう。

立花毘沙門堂にはこの毘沙門天像のほかに、もう一体の小さな毘沙門天像と、増長・持国の二天像がおさめられている。小さな毘沙門天像は像高わずか六六センチ、作りも柔らかで童子像のようにさえ見える、丸みを帯びた像である。平安後期の作とされ、先の立花像に倣つて後世に今一度作られたものであろうか、姿勢や着衣に共通点がある。しかし、右手は後ろにさげて、戟を斜めに下ろしていたと見え、この点ではあまり例の無い造像である。

これらの像を擁する立花毘沙門堂は、かつてこの一帯に強い勢力を誇つた極楽寺の、北谷を守る一施設であつた。極楽寺は今でこそ廃寺になつてゐるが、胆沢城の北に位置し、平安の当時は国分寺に準ずる役割を担う「定額寺」にも任じられた、由緒ある天台寺系寺院である⁽²⁶⁾。この極楽寺の本堂があつたとされる北上市の国見山頂付近には、もう一箇所毘沙門堂の跡と見られる遺跡が出土してお

り⁽²⁷⁾、ここからはほぼ真北に2キロの位置に立花毘沙門堂が更に建てられたのは、極楽寺自体の北方の守りとして毘沙門天を奉るためであつた可能性が高い。

D 藤里毘沙門堂の造像

立花毘沙門堂像に続く重要な像として挙げられるのが、江刺市・藤里毘沙門堂の兜跋毘沙門天像である。トチノキの一枚より彫り出された厳肅さの漂う像で、十世紀末ごろの作と見られている⁽²⁸⁾。成島像に似て正面性の高い像で、ほぼ直立の姿勢を地天女に支えられている。中国風の鎧をびつたりとまとい、頭には帽をかぶり、左手に宝塔を捧げ、右手で戟を地に突いている。袖口の表現や鎧の上にかかる天衣のことを除けば、成島像との共通点が多く、関連の深さを思わせる。

この像の最大の特徴としては、顔面や腕を除いた前半面に整然と刻まれた、鈍彫の跡が挙げられる。立花像よりもはるかに意図的に、鮮やかな縞模様として残されたこの鈍彫は、像に彩色や漆箔の跡が無いこと、彫り跡が前半面にみに残されていることなどから、工程の途中で放棄されたものでないことは明らかである。白木のまま、素材の樹木

に備わる神性を表現するという、鈍彫の思想を明瞭に示した作品であると言えるだろう。同堂にはこのほかにももう一体の毘沙門天像、その脇持として作られた吉祥天立像・善拭師童子立像、更に十一面観音像が納められている。

E その他

北上地方と言うにはやや北に過ぎるかも知れないが、紫波郡紫波町・正音寺にも毘沙門天像が残されている。一木造り、像高一七四センチの立像で、平安後期―鎌倉初期の作とされているが、損傷が激しく、足下に邪鬼を従えているのか、地天女の支えがあつたのかさえ分からなくなっている。保存状態が惜しまれるところである。北上地方には他にも、正法寺・最明寺・小名丸毘沙門堂・西方寺毘沙門堂・小山田薬師堂にそれぞれ一体ずつ毘沙門天像が納められている。ここでは取り上げないが、いずれも鎌倉期を下らぬ作であると目されており、その数がこの時期北上地方で毘沙門天の造像が行なわれ続けたことを示している。また北上地方では、四天王像よりも独尊の毘沙門天像の方が目立って造像されていたことにも注目すべきであろう。

北上地方における古代仏教彫刻としては、毘沙門天像の

ほかに、一般的に本尊として奉られることの多い尊格よりも、十一面観音像や聖(正)観音像といった在来の信仰に支えられたと見られる作例が目立つ。観音像、特に十一面観音像はこの時期の東北各地に作例が見られ、厳しい生活に関わる現世利益に対する信仰、あるいは地域の山岳に関わる長谷寺・白山信仰が、東北地方に広がるのとあわせてその造像が行なわれたことが理解できる。しかし、毘沙門天像の作例がこれほど集中しているのは北上地方に限られている。このことは何を示すのか。

六、北上地方の毘沙門天像と田村麻呂伝説

A 主要な三像の結びつき

北上地方の毘沙門天像を見ていく中で、基準的な作例として中心に据えるべきは、現存する作例中最も状態が整っており、造像された年代もほぼわかつている成島の兜跋毘沙門天像であろう。これを最も古い作例とし、続くものとしては、やはり状態が良く、独尊像として作られた立花像と藤里像が、重点的な検証のできる像である。この三像を比較検証すると、その関連性と、造像における二つの流れ

が発見できる。

まず、成鳥像と藤里像だが、この二体には明らかな関連がある。この地域では他に見られない兜跋形であるという点、像の正面性の高さ、服制・姿勢なども、藤里像が成鳥像に倣って造像されたことを思わせる。一方立花像は、兜跋形ではないし、姿勢も成鳥・藤里像と違って動的なものであるため、これらと無関係であるように思われるが、現地で作品を観察したところ二像との関連も多く発見できた。

まずは、腹部が大きく膨らんだ像のプロポーションである。三像とも胸部で一旦締められた帯の下から腰の帯まで、ぶつくりと太鼓腹のように腹が膨れている。太い腰周りの表現は毘沙門天像に共通の表現だが、腹の膨れ具合が奇妙に目立つこの体軀の表現は、東北地方の古代仏教彫刻には時折見られる特徴的なもので、特に北上地方の毘沙門天像には多く見ることができるといえる。胸部の帯から上にこういったふよやかな身体表現が一切無いところは成鳥・立花・藤里の三像に共通する、珍しい箇所である。

下半身の着衣に注目すると、鎧とその下の衣の表現にも共通点がある。成鳥像の腰帯下の鎧はスカート状に二段になっており、その前面のあわせは前垂れで隠されている。

鎧の下には衣の裾が出て、その衣紋が前垂れからはしり、鎧の線とあわせて幾重かの段を成している。非常に形式的な表現だが、立花像や藤里像もこれに倣ったと見えて、他地域の毘沙門天像のように鎧や衣の構造を詳しく表現することはなく、立花像は前垂れから曲線的な衣紋、藤里像は直線的な衣紋を走らせている。成鳥像のバリエーション的着衣表現と言えらう。

また、成鳥像に見られる特徴的な天衣の表現が、二像にも形を変えて現れている。成鳥像の鎧の上に両肩から通された天衣は、腰帯で一旦止められ腰部前垂れの上でU字型にまとまっている。一方立花・藤里像には前垂れ上のU字型部分しか天衣表現が見て取れない。しかし実際に作品を注視したところ、立花像の腰帯の上には天衣の両端が出ており、それはよく見ると欠けたような跡でもあった。両肩にも同様に、欠けたように突然途切れた天衣の切れ端とも言える表現が見られ、このことから、立花像でもかつて成鳥像同様の天衣表現がかつてされており、それが後世破損した可能性は十分にあると考えられる。藤里像は、同じく腰帯下に唐突に天衣表現があり、帯の上には切れ端などは出ていないが、両肩に鎧の一部としては不自然な、立花像

に似た切れ端のような表現がある。立花像か、何れかの像を模倣した可能性も否定できない。

B 田村麻呂伝説との関連

以上見てきた通り、この三像には深い関連性があり、これらに続く北上地方の各毘沙門天像にも、毘沙門天という造像の主題だけでなく、技法や表現に一定の共通点がある。同じ手法を使って毘沙門天が繰り返し表現されたことには、強力な背景事情があったはずである。

作例の分布を概観すると、北上地方のこういった動きに影響を与えたのは、この一帯に勢力を誇った古代極楽寺の活動ではないかということが見えてくる。現在毘沙門天像が納められた各寺院は、それぞれ極楽寺同様の「慈覚大師や坂上田村麻呂開基の縁起」を持つ天台系寺院であり、また、山深いその立地から、この地方の修験道の霊場であった極楽寺とはどうしても関わりが深かったと思われる。

極楽寺には、八〇八年、国見山頂付近に毘沙門堂が田村麻呂によって建立され、百体の毘沙門天像と四天王像、更には成島像を上回る大きさ二丈八尺の巨大な兜跋毘沙門天像が納められていたという寺伝が残っており⁽²⁹⁾、胆沢城

の北方鎮護のため、北方守護神の毘沙門天を中心的に奉っていたであろう事は容易に想像がつく。極楽寺を筆頭とした北上地方の天台系寺院も、すべて胆沢城の北東に位置するものばかりで、これらの寺院に納められた毘沙門天像が極楽寺の作例を先例として同様の意味を持つていると考えられる。しかし、発見された遺物の年代から、古代極楽寺の毘沙門堂の建立は胆沢城創建期にやや遅れていることが解っており⁽³⁰⁾、北上地方の毘沙門天像を一概に、田村麻呂すなわち中央の要求による胆沢城の北方鎮護の像でしかないと決めつけるわけにはいかない。そういった性格を持ちながらも、後世に別の流行から造像されたものだと考えられる。

坂上田村麻呂は東北地方を平定したが、その後は中央に戻り、彼の北方平定の活躍は入植者達によって次第に北方鎮護の毘沙門天と結びつけられた伝説となっていく⁽³¹⁾。岩手に残る伝説では、田村麻呂は毘沙門天の生まれ変わりである、とされたり、蝦夷を退散せしめるために毘沙門天が降臨し田村麻呂に力を貸した、とされたりしている⁽³²⁾。北上地方の毘沙門天像を擁する寺院はこうした伝説を縁起に添え、像に田村麻呂の姿を仮託していることを強調して

いる。この地方に古くから残る「毘沙門天像の脛に味噌を塗る」風習は、毘沙門天が田村麻呂の危機に泥の中から現れて足下を泥土に塗れさせながら窮地を救ったという伝説によるものであり⁽³³⁾このことから毘沙門天像と田村麻呂の伝説が、長い間結びついて親しまれてきたことはよく解る。

『吾妻鏡』文治五年（一一八九年）の条ですでに田村麻呂と毘沙門天の伝説が記されている⁽³⁴⁾ことから理解されるように、北上地方では相当早くからこの伝説が定着していた。そして古代極楽寺は、田村麻呂の功績と仏教による救いの意味を併せ持たせるために、毘沙門天像を繰り返し造像したのではないだろうか。この土地に平穩をもたらし、た英雄は、仏教に関わりが深く、仏法の加護を受けている存在であるという主張が、多くの毘沙門天像に込められているのだ。像そのものの頼もしい印象から、その主張は民衆に、天台寺系の福田事業という具体的な救いと同時に、内面的な救いや支えとして受容されたのである。

本論で中心的に取り上げた、現存する毘沙門天像群は、繰り返し述べる通り、胆沢城の創建期や極楽寺勢力の進出時期とは年代的に隔たりがある。なぜ勢力拡大時に即造像

がなされなかったのが疑問として残るが、それは、極楽寺勢力が十世紀以降の布教活動や地域社会の形成を充実させるために、「田村麻呂伝説に仮託した毘沙門天像の造像」を選択したためだと考えることができる。北上地方の毘沙門天信仰とは、地域に根差した信仰ではあるが、古代からの、土地の神を崇めるような土着の信仰ではなく、仏教が東北地方に自力で深く根付くために、後世極楽寺によって造り出された信仰の形態なのである。

北上地方の毘沙門天には、成島・藤里像の兜跋形を見せる作例と、立花像を初めとする邪鬼を踏み動的な作例の二系統があつた。これはおそらく、古代極楽寺毘沙門堂に納められていたという、「百体の毘沙門天像」と「巨大な兜跋毘沙門天像」が二つの源流となっていたのだろう。極楽寺の影響下、田村麻呂と同一視されたこれらの毘沙門天像は次々と造像され、成島像・立花像・藤里像と時を下るうちに、露だつた怒りの表情と他を威圧する像容は薄れていく。次第に内面的な表現に重点は移り、鈍彫などからも見て取れるように地域に密着した造像がなされ、徐々に安定していった土地の事情を反映している。夷狄や怨霊を退散させる像から、土地を守る鎮護の像として、毘沙門天像は

その意味合いを少しずつ変化させてきたのかも知れない。

おわりに

東北地方は征夷による平定の後も、小さな反乱や厳しい自然、蔓延した疫病などによって、不安な情勢が長く続いた土地である。この状況下で仏教が勢力を伸ばそうとするとき、教義ばかりでその目的が果たせるはずはなく、最も強く求められたのは具体的で目に見える救いだったと考えられる。定額寺として国家の後押しを得た古代極楽寺勢力だったが、福田事業の展開や身近な山岳を仏教に取り入れることで、民衆への布教の徹底を図った。そして更に、仏教の救いを解りやすく提示するために、毘沙門天像と田村麻呂伝説を結びつけて、仏教彫刻を積極的に利用したに違いない。仏典、仏像そのものの内容や意味だけでなく、独特の背景が像に託され、そのことが広く民衆に、仏教と寺院を受け入れさせた。北上地方のこうした仏教文化の動きは、地方での布教活動において仏教彫刻が成し得る役割を、よく示していると思う。

註

- (1) 佐藤昭夫「成島毘沙門堂の諸像」(『仏教芸術』八五号、一九七二年)などに指摘されている。
- (2) 松浦正昭「日本の美術 三二五号 毘沙門天像」(至文堂、一九九二年)。
- (3) 宮治昭「インドの四天王と毘沙門天」(『日本の美術』三二五号、一九九二年)。
- (4) 前掲(2) 資料による。
- (5) 前掲(1) 論文による。
- (6) 前掲(2) 資料による。
- (7) 前掲(2) 資料による。または、松本文三郎「兜跋毘沙門天攷」(『東方学報』京都 第十冊 第一分冊、一九三九年)。
- (8) 松本文三郎「兜跋毘沙門天攷」(『東方学報』京都 第十冊 第一分冊、一九三九年)。
- (9) 前掲(2) 資料による。
- (10) 岡田健「東寺毘沙門天像 ― 羅城門安置説と造立年代に関する考察 ― (上)」(『美術研究』三〇七号、一九九二年)。
- (11) 松本榮一「兜跋毘沙門天像の起源」(『国華』四七一号、一九三〇年)。
- (12) 前掲(8) 論文による。
- (13) 猪川和子「地天に支えられた毘沙門天彫像 ― 兜跋毘沙門

天像についての「考察」(『美術研究』二二九号、一九六三年)。

(14) 前掲(8)論文による。

(15) 東北地方の主な毘沙門天像

岩手県

藤里毘沙門堂 毘沙門天三尊像・兜跋毘沙門天立像

墨石寺

立花毘沙門堂 毘沙門天立像・毘沙門天像

正智寺

成島毘沙門堂 兜跋毘沙門天立像

山形県

出羽三山神社 毘沙門天立像

宮城県

陸奥国分寺 毘沙門天立像

福島県

勝福寺 毘沙門天立像

如法寺 毘沙門天立像

勝常寺 四天王立像

(16) 蝦夷については『日本書紀』に多くの記述が認められる。以下はその主なものの抜粋。

『日本書紀』卷第七 大足彦忍代別天皇 景行天皇「廿七年春二月辛丑朔壬子、武内宿禰自東園還之奏言、東夷之中、有日高見國。其國人、男女並椎結文身、爲人勇悍。是總曰蝦夷。亦

土地沃壤而曠之。擊可取也。」

『日本書紀』卷第七 大足彦忍代別天皇 景行天皇「秋七月癸未朔戊戌、天皇詔群卿曰、(中略)朕聞、其東夷也、讎性暴強。凌犯爲宗、村之無長、邑之勿首。各貪封壤、並相盜略。亦山有邪神。郊有姦鬼。遣衢塞徑。多令苦人。其東夷之中、蝦夷是尤強焉。男女交居、父子無別。冬則窟穴、夏則住櫛。衣毛飲血、昆弟相疑。登山如飛禽、行草如走獸。承恩則忘。見恐必報。是以、箭藏頭鬢、刀佩衣中。或聚黨類、而犯邊堺。或伺農桑、以略人民。擊則隱草。追則入山。故往古以來、未染王化。」

『日本書紀』卷第二十六 天豐財重日足姬天皇 齋明天皇「五年(中略)秋七月丙子朔戊寅、遣小錦下坂部連石布・大仙下津守連吉祥、使於唐國。仍以道奧蝦夷男女二人、示唐天子。」

『日本書紀』卷第二十六 天豐財重日足姬天皇 齋明天皇付隨收録「博德日誌」天子問曰、此等蝦夷國有何方。使人譴答、國有東北。天子問曰、蝦夷幾種。使人謹答、類有三種。遠者名都加留、次者名鹿蝦夷、近者名熟蝦夷。今此熟蝦夷。每歲、入貢本國之朝。天子問曰、其國有五敵。使人謹答、無之。食肉存積。天子問曰、國有慶舍。使人謹答、無之。深山之中、止住櫛本。天子重曰、朕見蝦夷身面之異、極理驚怪。使人遠來辛苦。退在館裏。後更相見。」

いずれも『日本古典文学体系 六八』（岩波書店、一九六七
年）を参照した。

(17) 佐々木博康「平泉と東北古代史 第五編 東北古代城柵」

三、戦後における城柵研究（岩手出版、一九九一年）。

(18) 桑原滋郎「陸奥・出羽の官衙遺跡」（『仏教芸術』一二四号、

一九八一年）。

(19) 『多賀城と古代東北』（東北歴史資料館、一九八五年）。石松

好雄・桑原滋郎「古代東北を発掘する 四 太宰府と多賀城」

（岩波書店、一九八五年）。高橋崇「蝦夷」（中央公論社、一九

八六年）。

(20) 久野健「黒石寺薬師如来像」（『美術研究』一八三号、一九五

五年）。

(21) 久野健「東北古代彫刻史論 上」（『美術研究』二一〇号、一

九六〇年）。

(22) 久野健「成島毘沙門堂の諸像」（『東北古代彫刻史の研究』中

央公論出版、一九七一年）に、「すなわち鎧の制をはじめとし

て、両肩からU字型をなして垂れる天衣、両袖の先を結んでい

るところ、地天の服制から二鬼の面相にいたるまで全く共通し

ている。ただし叡山前唐院の毘沙門天像は踏下げの像で、成島

毘沙門天像は立像であるという点が違っている。ところが、

『別尊雜記』の註記には「又文殊堂毘沙門此様立像」とある。

すなわち、成島毘沙門堂の兜跋毘沙門天像は、おそらく叡山の

文殊堂にあった兜跋毘沙門天像と同形相の像であったことが分
かる」とある。

(23) 前掲（一）論文による。

(24) 『きたかみの古仏』（北上市立博物館、一九九一年）。

(25) 久野健「鈍彫仏像論」（『仏教芸術』八五号、一九七二年）。

(26) 『日本文徳天皇実録』に八五七年、「陸奥國極楽寺」を定額

寺として任じたという記事がある。以下はその抜粋。

『文徳實録』卷第九 文徳天皇 平安元年 六月、戊辰、在

備中國四品吉備津彦命神授三品、在陸奥國極楽寺預定額寺、充

燈分并修理料稻千束、懇田十町、（下略）（『増補 六国史 卷

八 文徳実録』（朝日新聞社、一九四〇年）を参照。）

この文献では極楽寺がどの地域に存在したか詳しく明記され

ていないが、発掘・研究の結果、文献の極楽寺が、現在は廃寺

となっている岩手県北上市国見山の極楽寺を指しているものと

確定された。詳細は以下の報告に詳しい。

『昭和五十一年度、五十二年度歴史資料調査報告書 岩手県古代

仏教資料調査』（『岩手県教育委員会、一九七八年）。

『北上市文化財調査報告書第一集 北上市極楽寺跡』（北

上市教育委員会、一九七二年）。本堂寿一「極楽寺座主坊跡緊

急発掘調査報告」（『北上市立博物館研究報告』第3号、一九八

〇年）。

(27) 『北上市文化財調査報告第六一集 国見山廃寺跡発掘調査概

報』(北上市教育委員会、一九八九年)。

『北上市文化財調査報告第六二集 国見山廃寺跡発掘調査報告』(北上市教育委員会、一九九〇年)。

『国見山極楽寺』(北上市立博物館、一九八六年)。

(28) 大矢邦彦『岩手県の仏像』(『仏像を旅する』(東北總)至文堂、一九九〇年)。久野健『東北古代彫刻史論 下』(『美術研究』二一〇号、一九六〇年)。

(29) 『国見山極楽寺』(北上市立博物館、一九八六年)。

(30) 『胆沢城跡・岩手県水沢市所在 発掘調査概報』(岩手県水沢市教育委員会、一九七五年～一九八三年・一九四年～一九九五年)。

『国見山極楽寺』(北上市立博物館、一九八六年)。

(31) 高橋富雄『みちのく古寺巡礼』(日本経済新聞社、一九八五年)には、「十一世紀後期の『陸奥話記』には「北天の化現」すなわち「毘沙門天の化身」とある。だとすれば、この方面では、毘沙門天をまつて、これを田村麻呂信仰に読み替えるというところもあったと考えられる。ましてや、鎮守府鬼門ということになれば、そこにこそ、北天の化現として、田村將軍がお

わし、鎮守府を守護し、エゾの國を万世にわたつて鎮護したもうのだという信仰が、だんだんにひろまっていったのも、当然とすべきである。」とある。

(32) 『岩手民間信仰事典』(岩手県立博物館、一九九一年)。

(33) 『岩手民間信仰事典』(岩手県立博物館、一九九一年)。「国見山極楽寺」(北上市立博物館、一九八六年)。

『吾妻鏡』卷八 文治五年十月「廿八日、(中略)被尋其號

之處、田谷窟也云々、是田村磨利仁等將軍、奉諭命征夷之時、賊首惡路王并赤頭等、搆奏之岩屋也、其殿洞前途、至于北十餘日、隣外濱也、坂上將軍於此窟前建立九間四面精舎、令摸鞍馬寺、安置多門天像號西光寺、寄附水田、寄文云、東限北上河、南限岩井河、西限象王岩屋、北限牛木長峰者、東西三十餘里、南北三十餘里云々、(下略)』(『吾妻鏡 一卷』(名著刊行會、一九七三年) 参照)。

(にしかわ あきこ)

年 表

西暦	年号	東北地方のできごと	日本の主なできごと
724	神亀 1	多賀城（陸奥国府）築かれる	
741	天平13		聖武天皇、園分寺・園分尼寺造営を発願
749	天平感宝 1		陸奥国から黄金が献上され、奈良大仏の鍍金となる
752	天平勝宝 4		東大寺大仏の開眼供養会を行う
760	天平宝字 4	桃生城・雄勝城造営される	
767	神護景雲 1	伊治城造営される。道嶋嶋足、陸奥国大國造となる	
774	宝龜 5	蝦夷の反乱。桃生城襲撃される。征夷軍これを鎮圧する	
776	7	征夷軍派遣	
777	8	征夷軍派遣	
780	11	伊治砦麻呂反乱し、按察使紀広純らを殺害。多賀城も焼かれる。これに對して中央から征夷軍派遣	
781	宝龜12		桓武天皇即位
784	延暦 3		長岡京へ遷都
786	5	蝦夷征討の準備始まる（この征夷は789年まで）	
788	7		最澄、比叡山寺創建（823年延暦寺に改称）
789	8	征夷軍、北上川にて大敗	
790	9	蝦夷征討の準備始まる（この征夷は795年まで）	
794	13		平安京へ遷都
797	16	坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命。蝦夷征討の準備始まる。（この征夷は801年まで）	
802	21	坂上田村麻呂、胆沢城を造営する。蝦夷の首領降伏する。	
803	22	志波城造営される	
805	24	「天下の徳政」論じられ、藤原緒嗣らの意見により蝦夷征討と新都の造営工事が停止される	最澄天台宗伝来
806	大同 1		桓武天皇崩御。空海真言宗伝来
809	大同 4		園分寺のない国、行事を定額寺で代行するよう定められる
811	弘仁 2	文室綿麻呂、東北北部の蝦夷を討つ。北上川流域に和賀・稗貫・斯波の3部を設置。坂上田村麻呂没	
816	7	会津の法相徳一、「仏性抄」を著わし最澄・空海の教えを批判	
817	8		最澄、「照権実鏡」で徳一に駁論
818	9		最澄、天台宗年分学生式を定める。「守護国界章」を著わす
822	13	最澄没	
829	天長 6	陸奥・出羽に疫病大流行（830年まで）	
830	7	出羽国大地震	

西暦	年号	東北地方のできごと	日本の主なできごと
837	承和 4	玉造彦の温泉石神噴火する。栗原・桃生以北の俘囚（帰順した蝦夷）が反復して定まらないので、兵1000人をもって非常に備える	
847	14		円仁（慈覚大師）、五台山より念仏三昧伝来
850	嘉祥 3	出羽国大地震	
856	斉衡 3	出羽国法隆寺、定額寺に任じられる	
857	天安 1	陸奥国極楽寺、定額寺に任じられる	
862	貞観 4	黒石寺の薬師如来像作られる	
869	11	陸奥国大地震。多賀城大被害	
878	元慶 2	出羽国夷俘（帰順した蝦夷）反乱する。秋田城攻略される	
879	3		『日本文徳天皇実録』完成
887	仁和 3	出羽国府移転（850年の地震で国府付近の形勢が悪くなったため）	この頃神仏習合（本地垂迹説）盛んに
894	寛平 6		遣唐使廃止
934	承平 4	陸奥国分寺、落雷により七重塔焼失。その他の被害も甚大	各地で自然災害の激増 末法思想の流行始まる
938	天慶 1		空也、京で念仏広める
939	2		平将門・藤原純友の乱（承平・天慶の乱）
944	7		奈良・大和長谷寺焼失
985	寛和 1		僧源信、『往生要集』を著わす
1002	長保 4		諸国司に神社・国分寺・定額寺の修造が命じられる
1016	長和 5		藤原道長、摂政となる
1047	永承 2	黒石寺の伝慈覚大師像作られる	
1051	6	前九年の役起こる（～1062年）	
1080	承暦 4	陸奥国分尼寺、転倒する	
1083	永保 3	後三年の役起こる（～1087年）	
1086	応徳 3		白河上皇の院政開始
1098	承徳 2	成嶋毘沙門堂に阿弥陀如来おさめられる	
1124	天治 1	中尊寺金色堂なる	
1156	保元 1		保元の乱起こる
1159	平治 1		平治の乱起こる
1167	仁安 2		平清盛、太政大臣となる
1170	嘉応 2	藤原秀衡、鎮守府将軍に任命される	
1180	治承 4		源頼朝、挙兵する
1181	養和 1	藤原秀衡、陸奥守に任命される	
1185	文治 1		平氏滅びる
1187	3	藤原秀衡没	
1189	5	源頼朝、奥州藤原氏を滅ぼす	
1192	建久 3		源頼朝、征夷大将軍就任

（参考文献）『日本史総覧』東京法令出版
『標準 日本史年表』吉川弘文館
『平泉の原像』北上川流域の歴史と文化を考える会
『国見山極楽寺』北上市立博物館
『蝦夷大将軍』高橋富雄 中央公論社